

論文の和文要旨

論文題目	自由主義期イタリアの知識人における倫理的実践 — 「社会問題」 論の展開を通して
氏 名	小田原 琳
本論の目的は、「社会問題」をめぐる議論の検討を通じて、この議論がはらむ「倫理」と「実践」の問題を析出し、19 世紀後半から 20 世紀初めにかけてのイタリア自由主義期において、この知的実践が切り拓いた地平を明らかにすることである。 1870 年代半ば、イタリアの知識人たちは、リソルジメントが解決しきれなかった問題として「社会問題」を発見する。それは、「南部」や「農民」など、圧倒的な文化的・経済的格差のうちに生きることを余儀なくされている人々を社会の内部に位置づける議論となった。 「社会問題」の発見と議論の展開には、観念よりも現象の観察を重視する実証主義の学問的流行が、ひとつの契機となり、また道具となった。しかし、自由主義期イタリアにおける「社会問題」論を軸としてこの実証主義を見た場合、そこには、客観性や科学性という、実証主義がみずから標榜する性質とは一見矛盾するような、強烈な倫理性が見出される。イタリアへの実証主義の導入の第一人者でもあったバスクアーレ・ヴィッラリは、実証主義的「歴史的方法」を通じて「南部問題」を考察したとき、その原因を、国の指導的階級としてのブルジョアジーの、指導するべき人々に対する関心の欠如に求めた。したがって、「南部問題」の解決は、ブルジョアジーの自己改革なくしてはありえないという倫理的な結論にいたる。ヴィッラリの「南部問題」論と彼の実証主義的歴史学の主張とを突き合わせて検討したとき、実証主義のもつ実践への指向こそが、この倫理性を導いていることが明らかになる。(第一章)。 この性質は、1870 年代半ば以降、「南部問題」をはじめとするさまざまな「社会問題」についての議論に固有の傾向となる。それは、「社会問題」の責任を指導的階級に（ある	

いは北部に) 帰し、倫理的な自己改革をとまなう「善導」を要求するようなブルジョアジー中心主義を堅固に示す。けれどもそのパターンリスティックな認識枠組みは、同時に、「問題」と見なされる地域や人々を、指導的階級とともに、国民国家の将来という単一のパースペクティヴのなかに位置づけるという意味ももっていた。別の言い方をすれば、「責任」という倫理的な場を措定することによって、指導的な階層と「下層階級」とを、同一の地平で記述することが可能になったのである。

実践的であろうとすることが倫理的であることを意味するのは、人文科学の分野においてだけではない。文学における実証主義的運動であるヴェリズモの代表的作家、ジョヴァンニ・ヴェルガは、漁・農民や鉱山労働者といったシチリア社会の最底辺に位置する人々＝〈敗北者〉をイタリア社会のもっとも生々しい現実と捉え、実証主義科学の影響を受けた文体によって「あるがままに」描こうとした。この記述行為のなかには、〈形式〉における実証主義の理念と「生それ自体」という〈主題〉の結合が見られる。ここには、フランチェスコ・デ・サンクティスからパスクアーレ・ヴィッラリへとつながる、またデ・サンクティスからルイーゲ・カプアーナを介してヴェルガにいたる、観念論－実証主義の相互浸透のプロセスを見ることができる。学問は生に肉薄しなければならないという信念と、実証主義的方法的な結合である。イタリアにおける学問としての実証主義に内在する倫理性の源泉の一端は、ここに求められるのではないだろうか。みずからを〈敗北者〉と同一化することはないけれども、彼らの生に現実そのもの、生そのものを見出してゆくヴェルガの態度は、ヴィッラリら初期の「南部問題」論者と重なり合う。ヴェルガにおいては、人は、運命の循環的な大河のなかで、誰もが次の〈敗北者〉になりうるので、〈敗北者〉は厳密には「下層階級」に限定されない。だがこの神話的な世界観を通じて、実際に作品に描かれた〈敗北者〉－近代国家の諸制度に適応することができずにさらなる悲慘に落ち込んでゆく人々と、勝ち残った人々を、一種の「運命の共同体」と見なすことが可能になる。その意味でヴェルガの文学行為もまた、「社会問題」的視角の一翼を担う、知識人の実践の一形態と考えることができる(第二章)。

19世紀末以降爆発的に増加した出移民現象もまた、「社会問題」のひとつであった。国外へ移民したイタリア人に対するイタリア語・イタリア文化教育を活動の柱としたダンテ・アリギエーリ協会の第二代会長であったときのヴィッラリの講演やエッセイには、移民という「社会的弱者」に対して、「南部問題」に対するときと同様の、倫理的責任を求める主張が見られる。この場合、移民の自由を認めただけで、彼らにイタリア語という

文明の言語を教育することが、倫理的な責務と見なされる。「優れた文明」にともなうこの責務は、移民先でイタリア人たちが出会う、他の民族に対しても適用される。それら他民族の人々が、彼ら自身の発展のためにイタリア語を必要としているなら、彼らに対しても倫理的責務は及ぶのである。「社会問題」的視角には、つねに両義性がつきまとうが、ここでもまたそれが見られる。この論理には〈文明化の使命〉が見え隠れしてはいるのだが、ヴィッラリにおいて、他民族は支配の対象ではない。理念的には、諸民族は「崇高な文明」の下に、各々の独立を保ちながら融和して共存するような様態が想像されている。その後の移民論が覇権主義的な色彩を帯びていくのとは、明らかに異なる論理に基づいていると思われる。さまざまな局面で「社会問題」論はナショナリズムと共鳴するが、ここではナショナリズムは、保護されるべき人々、優れた文明の恩恵にあずかるべき人々という観念について、「社会問題」論の拠って立つリソルジメント的な理念とは性質を異にした排他性をもっているだろう。ナショナリズムにおいて「イタリア人」は、すでに閉じられた共同体となってしまうていて、「文明」の「恩恵」というかたちの下であっても、参入することは許されない（第三章）。

「社会問題」論は、それを世論に対して提起すること自体に、知識人の社会的な機能がはらまれている。シドニー・ソンニーノの制度改革に関する議論は、その点で、「社会問題」的視角が開いた実践的空間を明瞭に示すだろう。ソンニーノもまた、「シチリア調査」を通じて、「南部問題」についてヴィッラリと同様の、指導的階層の「責任」という観念にたどりつく。より現実的で実際のソンニーノにとって、指導的階層が、とくに行政権に収斂される社会的な義務を十全に果たすために求めるのが、普通選挙制であり、「全体的利益」の代表者としての君主のみに責任を負う行政権である。「社会問題」を生じさせる、社会的現実と国家との乖離は、「多数者」の意志が国政に反映されないことが要因であると考えたソンニーノは、その分裂を克服する体制を構想したのである。重要なことは、この構想において、要求を汲み上げられるべき国民のうちの「多数者」は、最終的には自発性をもって政治に参入することを要請されるということである。「問題」として認識された人々―農民や、のちには都市工業労働者、それらの人々が展開する諸運動―は、単なる「善導」や「操作」の対象ではなく、教育を通じて主体的に国家と社会に参画するべき人々と見なされる。ここにおいて「社会問題」的視角は、民衆（「下層階級」）を、その声に耳を傾けなければならない、意志をもった主体として把握する枠組みを用意した。社会改革は、「多数者」の声に答えるものでなければならず、また、最終的には「多数者」の

自立と主体性を求めるという意味で、純粋な「上からの改革」ではないのである（第四章）。

国家統一によって、イタリアのエリートは、内部にある異質なものの存在を発見する。それは知識人たちによって「社会問題」として言語化され、農民や労働者、「下層階級」という具体的な存在として記述されるようになる。「社会問題」論は、それらの民衆がおかれた困難な状況を、近代国家が目指すところとの乖離として把握し、問題を放置することを倫理的責任において拒否するという認識枠組みを構築する。社会的変化の受け手として登場してきた民衆は、意志と要求を汲み上げられるべき集団となり、彼らの主体的な〈合意〉を獲得することが体制の正統性を保障するような存在と見なされるようになる。「社会問題」的視角は、その意味で、民主主義への到達に必要な倫理を生み出すが、同時に、「全体国家」の観念の萌芽も含んでいる。いずれにせよ、この倫理は、広い意味での社会改革がそれにしたがいなければならない命法となったという意味でたしかに、知的倫理的実践であった。